

要介護高齢者の息子による虐待の要因と多発の背景

ウエダ テルコ ミヤケ マリ ニシヤマ トシマサ タジカ アラン アライ ユミコ
上田 照子*1 三宅 真理*2 西山 利正*3 田近 亜蘭*4 荒井 由美子*5

目的 息子による高齢者介護の実態と虐待の背景要因を明らかにし、近年の多発の背景について検討する。

方法 調査は大阪府A市の居宅介護支援事業所の介護支援専門員（以下、ケアマネ）94人を回答者とし、ケアマネの担当している利用者の主介護者である息子のすべてと介護家族による虐待ケースを対象として質問紙法により行った。67人の回答（回収率71.3%）を得、60人の回答を有効回答とした。これらのケアマネが担当している利用者総数は1,279人であった。別に、ケアマネ4名と、訪問介護員10名を対象として、息子による介護の特徴と関わりの難しさ、必要と考えられる支援等について各々約90分のグループインタビューを行った。

結果 主介護者の構成割合は息子が11.1%を占めていた。息子の56.3%が独身であった。虐待のみられたケースは主介護息子142人中27人で息子以外の家族では37ケースであった。断面での主介護家族数に対する虐待数の割合（以下、出現率）は主介護息子では19.0%であり、息子以外の家族による出現率に比較して高率であった。虐待の有無と高齢者の属性、息子の属性、介護環境等との関連を検討した結果、「要介護度が高い」「認知症による日常生活自立度が低い」「息子との人間関係が悪い」「近隣との交流がない」、息子が「独身である」「経済状態が苦しい」「自己中心的である」「怠惰である」「親への依存がある」「介護の協力者がいない」「介護知識・技術が不十分である」「介護負担感が大きい」介護者になった経緯が、「高齢者の希望ではない」などにおいて虐待が有意に高率であった。

結論 在宅の要介護高齢者における虐待は息子において高率であった。息子において虐待が高率である背景には、息子ゆえの介護環境条件があり、これらが虐待のリスクを高くしていることが示唆された。息子における虐待の予防には、息子特有の介護環境条件に配慮した施策や支援が求められる。

キーワード 高齢者虐待、要介護高齢者、虐待の要因、家族介護者、息子

はじめに

わが国における高齢者虐待は1990年代から社会問題となりはじめ、しだいにその深刻さが増すようになってきた。その対策として、2006年4月から高齢者虐待防止法が施行されるに至っ

た。また、介護保険法の2006年の改正により地域包括支援センターが地域における高齢者や家族の相談窓口となり虐待防止の役割を担うようになった。しかし、虐待の実態や要因についてはまだ十分明らかになっておらず、虐待も減少しているとはいえない状況にある。

*1 流通科学大学サービス産業学部教授 *2 関西医科大学公衆衛生学講座助教 *3 同教授

*4 関西医科大学精神神経科学講座助教 *5 国立長寿医療センター長寿政策・在宅医療研究部長

近年、息子による虐待が目立つようになってきたが、家族による虐待を続柄別にみると、医療経済研究機構の全国調査¹⁾の結果においては息子による虐待が全体の約3分の1を占めている。また、2007年末に厚生労働省より発表された「平成18年度高齢者の虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律に基づく対応状況に関する調査結果」²⁾においても息子によるものが38.5%を占め最多であった。マスコミ等の報道でいわゆる介護殺人と呼ばれるものも息子によるものが3分の1を占めている³⁾。家庭内における虐待に息子が占める割合は、1990年代に行われた調査ではおよそ20%前後であり、嫁によるものが上位を占めていた⁴⁾⁻⁶⁾が、2000年代に入ってから調査⁷⁾⁻¹¹⁾では30%を超える報告がほとんどとなっており、息子は続柄の中でも最多となり、嫁の割合は減少の傾向にある。

息子による虐待の割合の増加の背景については、近年の息子や夫など男性の介護者の増加¹²⁾が一因と考えられているが、まだその研究は進んでおらず明らかにされていない。今後、ますます息子による虐待が増加することも懸念される一方で、息子による虐待は生命にまでおよぶ重篤な虐待への発展の可能性も大きい。虐待の発生要因や多発の背景を明らかにすることは、防止策を講じる上で重要であり緊急の課題と考えられる。

しかしながら、高齢者虐待に関する調査、研究の多くが家族全体を一括しての分析となっており、続柄別に詳細に検討した報告や息子に焦点をあてた報告は少ない¹¹⁾⁻¹³⁾。また、虐待ケースのみあるいは虐待ケースの一部を調査対象として検討した調査が多くを占めている¹⁷⁾⁻⁹⁾。この背景として、家族による虐待という調査の性格上、家族を直接の回答者としにくい側面があり、多くの調査が高齢者と関わりをもつ専門職を回答者としているが、一人の専門職が多くの利用者を担当しており、これらの調査協力者にかかる負担が非常に大きくなるということがあげられる。

本調査では、これらを踏まえて特に高齢者虐

表1 虐待の形態別内容

身体的虐待：打撲傷、やけど、捻挫、脱臼、すり傷、切り傷、骨折、青あざ、殴る、蹴る、たたく、拘束する（ベッドに縛りつけたりする等）、部屋から出られないように閉じ込める、その他
心理的虐待：罵倒、ののしり、侮辱、叱責、脅迫、非難、悪口を言いふらす、無視、べつ視、返事をしない、いやがらせをする、その他
経済的虐待：勝手に金銭や年金の使い込み・取り上げ、日常必要な金銭を渡さない／使わせない、無断で資産・現金を自分名義にする、その他
世話の放棄放任（意図的、非意図的）：入浴や排泄介助の放棄による不衛生状態が生じている、必要な水分をとらせていない、本人に適切な食事を作らない／与えない、必要な薬をのませない、必要な医療を受けさせない、必要な介護サービスを利用させない、一人だけにして放っておく、食事内容が適切でない、水分補給が適切でない、排泄に対する世話が適切でない、入浴の回数が少ない、保健・福祉サービス利用させたくても費用がかかるので利用していない、その他
自己放任：本人が意図的に自分の清潔保持や健康管理をしないために健康上の問題が生じている、本人が意図的に必要な食事や水分をとろうとしない、必要な食事制限を守ろうとしない、必要な生活習慣の改善を意図的に怠る、その他
性的虐待：性的ないたずら、無理な性的関係、性的にはずかしめるような行為（裸にして放置する等）、その他

待の加害家族の中で最多を占める息子に焦点をあて、主介護者の息子についてはすべてのケースを対象とした調査とし、息子における高齢者介護の実態と虐待の要因を明らかにするとともに、近年の虐待の多発の背景について検討を行った。

調査対象と方法

（1）質問紙による調査

調査は、大阪府A市の居宅介護支援事業所の介護支援専門員（以下、ケアマネ）を回答者として、ケアマネの担当している利用者の介護家族による虐待のケースと主介護者である息子のすべてを対象とし、質問紙法により行った。

調査票は、各ケアマネの担当しているケースの全数を把握する概況調査票と個々の利用者と家族の状況を把握する個人票とした。個人票はさらに息子用と息子以外の家族用の2種とした。質問紙の配布はケアマネ部会において調査の概要の説明を行いケアマネに配布し、後日、市役所に設置した回収箱にて回収した。

調査項目の概要は高齢者の属性、介護者の属性、介護環境、介護状況、虐待の状況等である。調査は2007年7～8月に行った。

調査票の配布対象としたケアマネ数は94人であり、このうち67人の回答を得た（71.3%）。調査票に不備のあるケースは除外し、60人のケアマネの60組の調査票を有効回答とした。主介護者総数は1,279人であった。

本報告では、高齢者虐待の定義は、筆者らで構成する寝たきり予防研究会の定義¹⁴⁾である「高齢者の人権を侵害する行為のすべてであり、身体的、心理的、性的な暴力により心身に苦痛を与えることや、金銭搾取、介護放棄などにより、高齢者を人として尊厳を保てない状態に陥らせること」を用いた。また、形態別の虐待の概要は表1に示したとおりであるが、寝たきり予防研究会で作成した形態別の虐待¹⁴⁾をより具体的な行為で示したものに改編して用いた。

本調査は利用者およびその家族介護者の個人情報保護のため、個人を特定できないよう個人票は無記名とし、年齢もカテゴリカルデータとして実施した。また、調査票の記入者であるケアマネについても無記名式の調査とした。

（2） グループインタビューによる調査

息子による介護の特徴をより具体的に把握するため、大阪府A市の近隣の居宅介護支援事業所のケアマネ4人と、同じく訪問介護事業所の訪問介護員（以下、ヘルパー）10人を対象として、各々約90分のグループインタビューを行った。インタビューは、息子が介護している場合の介護環境の特徴、息子への関わりの難しさ、息子による介護に対する専門職としての考え、

息子の介護における介護環境を良くするために必要と考えられること等の内容について半構造的に行った。

調 査 結 果

（1） 主介護者の続柄別構成割合

概況調査より、主介護者の続柄別の構成割合は表2に示したとおりであるが、息子は11.1%を占めていた。

（2） 高齢者の基本属性と介護の状況について

女性が84.5%、80歳以上が約6割を占めていた。家族構成は、独身の息子と同居が最多で63.4%であった。要介護度は要支援が最多で、ついで要介護2であった。認知症における日常生活自立度は、以上が39.4%を占めていた。近隣との交流は、ほとんどない者が46.5%であった（表4）。

（3） 主介護息子の基本属性と介護の状況・環境について

息子の年齢は50歳以上で約3分の2を占めていた。配偶者のいない者は56.3%であった。就労状況のうち、失業中は8.5%、パートタイマーは4.9%であったが、パートタイマー7人のうち6人は60歳未満であった。経済状況は「かなり苦しい」「やや苦しい」を合わせると28.2%であった。介護者になった経緯は、「息子の希望による」と「たまたま独身で同居していたから」が高率であった。

息子の介護に対する知識や技術は26.8%が

表3 虐待の形態別割合（介護者群別）

（単位 人、（ ）内%）

高齢者との続柄	主介護者の分布	続柄別虐待数と出現割合	虐待者の構成割合
総数	1 279 (100.0)	64 (5.0)	64 (100.0)
息子	142 (11.1)	27 (19.0)	(42.2)
夫	141 (11.0)	6 (4.3)	(9.4)
妻	196 (15.3)	8 (4.1)	(12.5)
娘	362 (28.3)	13 (3.6)	(20.3)
嫁	214 (16.7)	7 (3.3)	(10.9)
その他	95 (7.4)	3 (3.2)	(4.7)
親族なし	129 (10.1)	— (—)	(—)

	主介護息子	息子以外の家族
総数	27 (100.0)	37 (100.0)
身体的虐待	5 (18.5)	7 (18.9)
心理的虐待	11 (40.7)	17 (45.9)
経済的虐待	5 (18.5)	2 (5.4)
介護の放棄・放任	17 (63.0)	19 (51.4)
自己放任	10 (37.0)	16 (43.2)
性的虐待	— (—)	— (—)

注 1) 各虐待の率は、介護者群間に有意な差は認められなかった（Fisherの直接確率法）。
2) 複数回答

「不十分」との回答であった。介護に対する負担感は「かなり大きい」と「少し大きい」を合わせると35.9%を占めていた（表5）。

（4）虐待の状況について

高齢者と主介護者との続柄別の虐待数を表2に示した。虐待のみられたケースは主介護息子では142人中27人で、断面での主介護家族数に対する虐待数の割合（以下、出現割合）は19.0%であった。息子以外の家族では、3から4%程度であり、息子が他の続柄の約4～5倍であった。主介護者による虐待の続柄別の構成割合は、息子が42.2%を占め最多であり、次いで娘の20.3%が多かった。主介護者でない息子による虐待は11人であった。

虐待の形態別割合を表3に示した。主介護息子では、「介護の放棄・放任」が最多で、ついで「心理的虐待」であった。息子以外の家族においても同様の傾向がみられ、介護者群間で個々の虐待の割合に大差はみられなかったが、主介護息子では経済的虐待がやや高率であった。

（5）介護状況・介護環境と虐待の発生との関連の検討

虐待の発生の背景要因を検討するため、高齢者および介護者の属性、介護状況や介護環境について虐待の有無との関連を分析した。ここでは主介護息子142人を分析対象とし、虐待のなかった115人と虐待のあった27人について比較検討した。有意差検定は χ^2 検定を用いた。結果を表4と表5に示した。

虐待が統計学的に有意に高率に認められた項目は、高齢者に関するものでは、「高齢者と同居している」「要介護度が高い」「認知症による日常生活自立度が低い」「息子との人間関係が悪い（「少し悪い」を含む）」「近隣との交流がない」などであった（表4）。

息子の環境に関する項目では、「配偶者がいない」「経済状態が苦しい」、介護者になった経緯が、「高齢者の希望ではない」「息子の希望ではない」「他の兄弟がしないから」、息子の性格・生活等が「自己中心的である」「怠惰である」「親への依存がある」「介護の協力者がいない」「息子の介護知識・技術が不十分である」

「介護負担感が大きい」「介護を苦痛に思っている・仕方なくしている」などに虐待が有意に高率であった（表5）。

表4 息子が主介護者である高齢者の基本属性と虐待の有無との関連

（単位 人，（ ）内％）

	総数	虐待なし	虐待あり	Fisherの直接確率法
総数	142(100.0)	115(81.0)	27(19.0)	
性別				
男	22(15.5)	16(72.7)	6(27.3)	n.s.
女	120(84.5)	99(82.5)	21(17.5)	
年齢				
65～79歳	57(40.1)	44(77.2)	13(22.8)	n.s.
80歳以上	85(59.9)	71(83.5)	14(16.5)	
息子との居住状況				
別居	52(36.6)	47(90.4)	5(9.6)	P < 0.05
同居	90(63.4)	68(76.8)	22(23.2)	
要介護度				
要支援・要介護1, 2	98(69.0)	85(86.7)	13(13.3)	P < 0.05
要介護3, 4, 5	43(30.3)	30(69.8)	13(30.2)	
認知症高齢者の日常生活自立度				
0, 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 68, 69, 70, 71, 72, 73, 74, 75, 76, 77, 78, 79, 80, 81, 82, 83, 84, 85, 86, 87, 88, 89, 90, 91, 92, 93, 94, 95, 96, 97, 98, 99, 100	86(60.6)	76(88.4)	10(11.6)	P < 0.01
M	56(39.4)	39(69.6)	17(30.4)	
息子への感謝の様子				
あり	87(61.3)	78(89.7)	9(10.3)	n.s.
なし	29(20.4)	22(75.9)	7(24.1)	
息子との人間関係				
よい・まあまあ	122(85.9)	107(87.7)	15(12.3)	P < 0.001
少し悪い・悪い	15(10.6)	5(33.3)	10(66.7)	
近隣との交流				
あり・わずかにあり	63(44.4)	59(93.7)	4(6.3)	P < 0.001
ほとんどない	66(46.5)	44(65.7)	23(34.3)	

注 1) n.s.: not significant
2) 無回答を除く

（6）配偶者の有無と介護環境との関連の検討

配偶者の有無と介護環境との関連を検討した結果を表6に示した。独身の場合には、「失業中・パート」「経済状況が苦しい」「介護者になった経緯が高齢者や息子の希望でない」「親への依存がある」「介護協力者がいない」「介護の知識・技術が不十分」「介護負担感が大きい」等が、有意に高率であった。

(7) グループインタビュー
による調査

表7に息子における介護の特徴および息子への関わりの難しさ、介護環境を良くするための支援について、ヘルパーとケアマネに対して行ったインタビュー結果のまとめを示した。

考 察

(1) 息子の介護の特徴と虐待の要因について

本調査において、主介護者である息子が独身である率は56.3%と高率であった。これまでの筆者の調査^{11) 18) 19)}でも約5割を占めていたが、2004年の世帯動態調査²⁰⁾における同年代の未婚率、50～54歳8.4%、55～59歳5.9%、60～64歳3.0%と比較すると、主介護息子が独身である率は離婚や死別を差し引いたとしても一般男性に比べてきわめて高率である。主介護者になった理由では、「たまたま独身で同居していたから」が32%と高率であり、このことが独身の男性介護者が多いことの一因となっていると考えられた。

息子による虐待ケースは、27人は主介護者である息子、11人は主介護者でない息子であり、主介護者が約7割であった。この割合は、厚生労働省の全国調査¹⁾では47%、大阪府B市¹⁸⁾では79%、大阪南部¹⁹⁾では55%、兵庫県C市の調査¹¹⁾では61%でありややばらつきはあるものの、主介護者でない息子がおよそ2～5割を占めていることになる。結果には示していないが、息子以外の家族のうち主介護者でない者が虐待をしているケースは2ケースのみで、主介護者でない者による虐待は息子において特徴的であり、

表5 主介護の息子の基本属性・介護環境と虐待の有無との関連

(単位 人、()内%)

	総数	虐待なし	虐待あり	Fisherの 直接確率法
総数	142(100.0)	115(81.0)	27(19.0)	
年齢				
50歳未満	49(34.5)	37(75.5)	12(24.5)	n.s.
50歳以上	93(65.5)	78(83.9)	15(16.1)	
配偶者の有無				
なし	80(56.3)	59(73.8)	21(26.2)	P < 0.05
あり	62(43.7)	56(90.3)	6(9.7)	
就業状況				
失業中・パート	19(13.4)	12(63.8)	7(36.8)	n.s.
常勤・自営業・定年等	123(86.6)	103(83.7)	20(16.3)	
経済状況				
かなり・やや苦しい	40(28.2)	24(60.0)	16(40.0)	P < 0.001
普通・ゆとりあり	101(71.1)	114(89.1)	14(10.9)	
介護者になった経緯(複数回答)				
たまたま独身で同居していた	45(31.7)	36(80.0)	9(20.0)	n.s.
高齢者の希望による	23(16.2)	22(95.7)	1(4.3)	P < 0.05
息子の希望による	55(38.7)	51(92.3)	4(7.3)	P < 0.01
他に介護する兄弟がいない	6(4.2)	4(66.6)	2(33.4)	n.s.
兄弟がしいないから	14(9.9)	8(57.1)	6(42.9)	P < 0.05
入所の希望				
入所・他の親族を希望	26(18.3)	18(69.2)	8(30.8)	P < 0.05
在宅で続ける	104(73.2)	90(86.5)	14(13.5)	
性格・生活(複数回答)				
自己中心的	9(6.3)	4(44.4)	5(55.6)	P < 0.01
怠惰	10(7.0)	3(30.0)	7(70.0)	P < 0.001
楽天的	13(9.2)	8(80.0)	2(20.0)	n.s.
親に依存	10(7.0)	7(53.8)	6(46.2)	P < 0.01
介護の協力者				
いない	24(16.9)	12(50.0)	12(50.0)	P < 0.001
たまにいる・いる	110(77.5)	98(89.1)	12(10.9)	
介護の知識・技術				
不十分	38(26.8)	22(57.9)	16(42.1)	P < 0.001
まあまあ・充分	91(64.0)	83(91.2)	8(8.7)	
介護負担感				
かなり・少し大きい	51(35.9)	35(68.6)	16(31.4)	P < 0.01
たいしたことなく	71(50.0)	64(90.1)	7(9.9)	
介護に対する思い				
非常に苦痛・仕方ない	30(21.1)	18(60.0)	12(40.0)	P < 0.001
普通・生きがい	82(57.7)	74(90.2)	8(9.8)	

注 1) 介護者になった経緯と性格・生活については各カテゴリーごとに Fisher の直接確率法を用いて検定。

2) n.s.: not significant

3) 無回答を除く

介護の有無にかかわらず虐待者となる可能性が高いことが示唆された。

虐待の発生と高齢者の属性、息子の属性、介護状況、介護環境等との関連を検討した結果は、先行研究において高齢者虐待の発生要因として報告されている^{4) - 6) 10) 15) - 17)}高齢者の自立度、認知症の有無、介護者との人間関係、介護負担感、経済状況などとおおむね同様の項目において有意な関連がみられている。このことから、息子においても家族全体と比較して虐待の発生に影響を及ぼす要因には大きな相違はないものと考えられた。

(2) 息子による虐待の多発とその背景について
本調査において虐待の出現割合は主介護息子によるものが19%であったが、大阪府B市¹⁸⁾で16%、大阪南部¹⁹⁾で17%、名古屋市¹⁰⁾で約20%と近似しており、主介護者である息子による虐待の出現割合はおおよそではあるが15～20%程度ではないかと推測される。これを息子以外の家族における虐待の出現割合と比較すると息子が数倍高率となっており、大阪南部¹⁹⁾や名古屋市¹⁰⁾、また全国調査¹⁾においても同様の傾向がみられている。

息子における高い出現割合の原因として、息子特有の要因の存在や要因の高い保有率等が考えられる。本調査において、介護の知識や技術に乏しい、介護負担が大きい、経済状況が苦しい、近隣との交流が少ないなどの場合に有意に虐待が高率であった。これらは女性にも共通する要因であるが、男性ではそのリスクが高くなりやすいと考えられる。家事や介護はこれまで日本の文化の中で女性の役割と考えられてきた経緯があり、教育や家庭の中においても男性が

これらを教わることは、少ない。しかし、高齢者を在宅で介護する場合、同時に家事が必要になり、要介護者がいればさらにその量も増え、内容的にもその質が要求される。介護についても同様に女性に比べ、見たり体験することなく現在に至っていることが多いと考えられた。夫も男性という点では息子と同じであるが、両者は年齢層、就業状況、家事や介護経験等において相違し、息子においてはよりリスクは高くなることが考えられ、夫に比較して虐待の出現割合が高いのではないかと推察される。

就業状況、経済状況、親への依存において虐待との間に有意な関連がみられたが、これらは相互に関連しあっていることが考えられる。また、息子の場合、インタビュー調査にみられるように親の介護に対する世間体、プライドというような精神面のわだかまりもあり、家事や介護の負担は身体的、精神的により大きくなることが考えられる。

一方、本調査において高齢者が介護を息子に希望している場合には虐待は低率であったが、

表6 主介護の息子の配偶者の有無別の介護環境

(単位 人、() 内%)

	独身	妻帯	Fisherの 直接確率法
総数	80 (56.3)	62 (43.7)	
就業状況			
失業中・パート	20 (25.0)	3 (4.8)	P < 0.01
常勤・自営業・定年等	60 (75.0)	59 (95.2)	
経済状況			
かなり・やや苦しい	36 (45.6)	4 (6.5)	P < 0.001
普通・ゆとりあり	43 (54.4)	58 (93.5)	
介護者になった経緯			
高齢者 or 息子の希望以外	63 (78.8)	18 (29.0)	P < 0.001
高齢者 or 息子の希望	17 (21.2)	44 (71.0)	
親への依存			
あり	12 (15.0)	1 (1.6)	P < 0.01
なし	68 (85.0)	61 (98.4)	
介護の協力者			
いない	22 (29.3)	2 (3.4)	P < 0.001
たまに・いる	53 (70.7)	57 (96.6)	
介護の知識・技術			
不十分	27 (37.5)	11 (19.3)	P < 0.05
まあまあ・充分	45 (62.5)	46 (80.7)	
介護負担感			
かなり・少し大きい	36 (53.7)	15 (27.3)	P < 0.01
たいしたこと無い	31 (46.3)	40 (72.7)	
介護に対する思い			
非常に苦痛・仕方ない	21 (35.0)	9 (17.3)	P < 0.05
普通・生きがい	39 (65.0)	43 (82.7)	

注 1) 性格・生活については各カテゴリーごとに Fisher の直接確率法を用いて検定。

2) n.s.: not significant

3) 無回答を除く

表7 グループインタビューのまとめ

	ヘルパー	ケアマネジャー
息子の介護の特徴や息子へのかわりの難しさ	- 息子は男性ということから、家事の経験もなく介護についての理解や技術に乏しい。 - 説明しても聞こうとしない、説明するとかえってパニック状態になったり、介護から逃げてしまう傾向にある。 - 親の介護に対する世間体、プライドというような精神的なわだかまりもあり、介護を避けているようにも見受けられる。 - 重介護になると介護は業者に任せにし、かえって自分ではひいてしまうという傾向もみられる。 - こちらの言うことを聞き入れてもらえずうざがられる。 - 介護は地獄であると思われるので介護について家族にあまり強く指示や要求をすることもしにくい。	- 息子が妻帯者の場合には妻がこれまでの嫁姑問題等の人間関係を根底にもっている場合が多く、介護を拒否する妻に代わって主介護者となっていることが多い。 - 息子が独身の場合には、親への経済的依存があったり、親が溺愛していたりするが、経済的な問題をはらんでいることが多い。また、息子が精神的な問題を持っていることが多い。 - 仕事を理由になかなか会ってもらえない。 - わからないことがあっても恥と思い質問しない。 1 割負担のため必要なデイやヘルパーを序々にキャンセルする。必要性はわかっていると言われてしまう。経済的なことは、深く聞くににくい。
支援介護環境を良くするための	助言をうるさがられたり、かえってそれならもうできませんと聞き直られることにもつながるので強くは言えない。私たちは常にしっかりと利用者を見て、気付くことがあれば介護者に注意・忠告することで高齢者を守っていくしかない。	- ケアマネのところだけではなく別のサポート機関や相談機関が必要である。 - 介護者同士で愚痴や悩みを語りあえる場の設置が必要。 - 経済的理由でサービスが利用できずに不十分な介護になっている人もいる。サービス基盤の整備が必要である。 - 介護に関する研修の場が必要である。

高齢者が息子に介護を希望することは少なく、筆者の他地域での調査においても高齢者が希望している率は8.6%¹²⁾、10.6%¹⁷⁾と低値である。高齢者に望まれた結果ではないという背景の存在は、介護意欲の低下につながる事が考えられる。内閣府の高齢者介護に関する世論調査においても¹⁸⁾、家族の中で介護を望む相手としては、配偶者57.3%、娘19.6%、息子5.3%であり、息子が介護者として望まれることは少ないのが実態といえる。

さらに、配偶者の有無と虐待との間に有意な関連がみられたが、独身の場合には、就業状況、経済状態、介護者になった経緯、親への依存、介護協力者、介護の知識、介護負担感などの介護環境条件が妻帯者に比較して悪いことから、虐待のリスクが高くなった結果ではないかと考えられた。インタビュー調査からは独身でいることの背景に精神的な問題をかかえている場合も多いことがあげられており、このことも考慮する必要がある今後検討課題としたい。

以上のように、主介護息子の介護環境条件は、他の家族のそれに比べ虐待のリスクが高くなることが考えられ、高い虐待の出現割合の原因となっていることが推察された。

(3) 息子による虐待の増加の背景について

近年の息子による虐待の多発のもう1つの大きな要因として、息子が介護に関わる率の増加があげられる。1990年代から継続的に家族介護者の構成割合を示した報告は少ないが、岐阜市の高齢者実態調査報告書²³⁾によると、息子が主介護者となっている率は1992年の5%から2001年の10%と推移している。津止¹²⁾も介護者の推移を検討し夫や息子の増加を説明しており、とくに息子が介護者になる率はここ数年の間に急増しているといえる。息子が介護に関わる率の増加の背景として、まず介護に対する家族の役割意識の変化があげられ、以前のように嫁や娘、妻の役割という意識は薄れてきている。本調査では、介護に関わるようになったきっかけとして「たまたま独身で同居していた」ことをあげているケースが3割強を占めており、男性の未

婚率の増加は介護に関わる率の増加の一因となる可能性が考えられた。近年、未婚割合は漸増の傾向にあるが、男性ではとくに50歳から64歳の年齢層における未婚率が上昇している傾向があり²⁰⁾、今後も息子が介護者となる率の増加が予測される。

このように、男性の未婚率の増加は未婚の息子の介護者の増加の一因となり、未婚であることが虐待を生じやすい介護環境を生じ、虐待の出現割合を高くしている可能性があることが推察された。

ま と め

息子による虐待の要因と多発の背景について考察した。息子が介護者である場合には息子であるがゆえの介護環境条件があり、これらが虐待の発生に影響を及ぼしていること、さらには独身の場合にはよりこれらのリスクが高くなることが示唆された。したがって、息子における虐待の予防のためには、このような息子特有の介護環境条件に配慮した施策や支援が求められる。仕事を持っている、あるいは介護のために働けない介護者を考慮した介護休業制度の充実が求められる。また、介護保険サービス利用者の1割負担は、経済的困窮がある場合には介護の放棄・放任につながる可能性もあり、今後の改正に向けて検討すべき課題と思われる。男性介護者が気軽に利用できる相談機関、介護技術の研修機関の設置も必要であり、介護サービスについてもきめの細かい対応が望まれる。しかし、インタビュー調査での意見にあるように、専門職の助言がかえってパニック状態をつくりたり介護から遠ざけてしまうこともあり、また息子というプライドが不適切な介護につながる可能性もあるなど、支援にも非常に難しい側面がある。息子のような立場の介護者にも利用しやすく、受け入れやすい相談機関、研修機関、サービスとする工夫が必要であろう。さらに、悩みを語り合えるような家族会等の設置など、利用者に必要な情報、介護のノウハウの入手やストレスの解消、孤立防止の場が提供されるこ

とも必要であると考えられるが、これらについても、男性は女性集団に馴染みにくい傾向もあり、また仕事のために参加が制約される者も多いことなどから、息子という立場への配慮が求められる。

今回の調査は、調査協力者の負担への配慮から個人票の調査は息子以外の家族については虐待ケースのみとしたため両者の比較検討が充分に行えなかった。今後は、対象介護者の無作為抽出などによる調査も考えられ、地域を広げ、さらには縦断的な調査によって検討を深めていく必要があると思われる。また、息子である介護者による虐待の防止のために具体的にどのような支援が効果的であるのかについての介入研究も必要であり、今後の研究課題としていきたい。

謝辞

本調査にご協力をいただきました介護支援専門員、訪問介護員の皆様はじめ関係者の方々に深謝いたします。

本研究の一部は、平成18年度日本興亜福祉財団ジェロントロジー研究助成ならびに平成19年度大阪ガス福祉財団研究・調査助成の助成を受けて実施した。

文 献

- 1) 医療経済研究機構．家庭内における高齢者虐待に関する調査報告書，2004；104-8．
- 2) 厚生労働省．平成18年度高齢者の虐待の防止，高齢者の養護者に対する支援等に関する法律に基づく対応状況に関する調査結果，2007；1-22．
- 3) 加藤悦子．介護殺人．東京：クレス出版，2005；44-5．
- 4) 田中荘司，老人虐待の調査実態からみえてきたもの．保健婦雑誌 1995；51(7)：517-23．
- 5) 上田照子，水無瀬文子，大塩まゆみ，他，在宅要介護高齢者の虐待に関する調査研究．日本公衆衛生雑誌 1998；45(5)，437-47．
- 6) 大國美智子，津村智恵子，臼井キミカ，他，高齢者虐待の全国実態調査 - 主として保健福祉機関調査より - ．東京：長寿社会開発センター，1997；4-53．
- 7) 金沢市：金沢市高齢者虐待に関する実態調査結果，金沢：金沢市，2003．
- 8) 大阪市社会福祉研修・情報センター，大阪市における高齢者虐待に関する調査結果報告書．(概要版)，大阪：大阪市社会福祉研修・情報センター 2005．
- 9) 大阪府立介護実習・普及センター，高齢者虐待に関する実態アンケート調査報告書．大阪：大阪府立介護実習・普及センター，2004．
- 10) 名古屋市高齢者虐待調査研究会，高齢者虐待の研究調査事業報告書，名古屋市，2004．
- 11) 上田照子，荒井由美子，西山利正．在宅要介護高齢者を介護する息子による虐待に関する研究．老年社会科学 2007；29(1)：37-47．
- 12) 津止正敏，斎藤真緒．男性介護者白書．京都：かもがわ出版，2007；27-38．
- 13) 鶴沼憲晴，関根薫．虐待者である「息子」の特徴と高齢者虐待への視点．社会福祉学 2007；47(4)：111-23．
- 14) 寝たきり予防研究会編，高齢者虐待 - 専門職が出会った虐待・放任 - ，京都：北大路書房，2002；1-11．
- 15) Mark S.Lachs, Lisa Berkman: A prospective Community-Based Pilot Study of Risk Factors for the Investigation of Elder Mistreatment. Journal of American Geriatric Society 42:169-73．1994．
- 16) Karl Pillemer, David Finkelhor, Cause of Elder Abuse: Caregiver Stress Versus Problem Relatives. American Journal of Orthopsychiatry 59: 179-87．1992．
- 17) Lachs MS, Williams C, O'Brien S, Hurst L, Horwitz: R Risk factors for reported elder abuse and neglect: a nine-year observational cohort study. Gerontologist 37:467-74．1997．
- 18) 未発表資料．
- 19) 上田照子，高齢者を介護する家族による虐待に関する研究，流通科学大学論集 2007；19(3)：57-68．
- 20) 国立社会保障・人口問題研究所 第5回世帯動態調査結果の概要．2004．
- 21) 内閣府，高齢者の介護に関する世論調査（平成15年7月）家族の中でだれに介護を望むか 2003．
- 22) 厚生労働省，平成16年国民生活基礎調査，2005．
- 23) 岐阜市老人保健福祉計画 介護者の状況 岐阜市：岐阜市老人保健福祉課．2003．